叶えたい夢

SyuutokuB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
叶えたい夢

【Ｎコード】
Ｎ３８５９Ｙ

【作者名】
ＳｙｕｕｔｏｋｕＢ

【あらすじ】
何回か小説を書こうとして断念、が多かったのですが、今回は続きそうな予感です
まあこんな前書きはいらないと思うので、

シスコン気味の主人公が訳ありの幼馴染と
シスコン気味の主人公の初恋の相手が

シスコン気味の主人公の大好きなバレーとその他のスポーツが

はっきりいって妹がどの位の頻度で出て来るかなんて自分にもわかりません

期待しないでください

第一話

九月二十三日

思いっきり走って、思いっきりジャンプして、思いっきり頭を使って、いつの間にか夢中になっていき、そして時間が経つのを忘れるくらい楽しんでいる。

どのスポーツにも全力で全力で向かっていく、そんな女の子がいた。

その子の汗が顎まで伝わり、床にポタポタ落ちる。そして、いつもより違うキュッキュという音が体育館中に響き渡る。

雨が降った時に体験できるような、髪が肌にくっついている状態、何よりもブラ透けがある。一番黒が、白い半そでのジャージが汗で透明に近づき目立つが、たまたまなのか、今日が勝負なのか考えものである。

その女の子は集中しすぎて、男子たちがどう見ているかなど気にしていない様子。それどころか、襟をパタパタさせて、あわよくば、胸が見えてしまう。

時々、自分や、自分のチームのナイスなプレイがあった時、嬉しさのあまり、ジャンプをして、その時両手を上下に振り、足も腰に当たりそうなくらい上げる。しかし一番は、輝くような誰もが魅了する笑顔魅せる。

笑顔が似合うだけあって、顔は整っており、目がパッチリの一重

まぶた、肌に何一つとして汚れが見えなくて、唇がいつも潤っていて、こめかみあたりに流れるキラッとした汗の粒、測定不可能なくらいの笑顔なのである。

髪もストレートでロング、いつもは縛っていないが、スポーツの時だけは、ポニーテイルにしている。そのせいもあって、余計に引き立つのかもしれない。

背は、標準よりは高く百六十五センチある。やる気だけでなく身体能力もずば抜けてあるので、身長に比例して、スポーツマン、もといスポーツウーマンになっている。

これだけでもいいのに、スタイルも抜群、特に腰のラインが、エロい。

この女の子の名前は、正木美夏乃、高校一年生である。

「な〜にボ〜っとみているのかな清次く〜ん」

曽我部憲一郎ことソガケンが、憎たらしく、わざとらしく、話しかけていた。

人間というのは、どんなに関心がなくても、突然、しかも大声で、しかもしかも耳元で声を囁かれると、どうしても反応してその声の方向に振り向いてしまう。

「――――ひっ、う、うん？何か言った？」

阿藤清次こと清次が、分かりやすい反応をした後、あたかも何もなかったように冷静に聞くふりをした。

「はは～ん。やっぱり美夏乃さんか？」

ソガケンは何も考えず、ふとお決まりの言葉を口に出した。

「うっ！うん？は～？ち、違うよ～。ただ時計を見てただけだよ」

――最初、最初は見るつもりなんてなかったんだ。ただ、ふと時間が気になって時計を見たら、ちょうど美夏乃さんが、美夏乃さんが目に入っただけなんだ。あの楽しそうな笑顔に釘付けになんてなっていない。ただ、うん？い、いやホントに目に入っただけなんだ。てか、何でこんな言い訳くさいことを言っているんだ俺、何も考えていないぞ～！――

第二話

清次は、蒸し暑い中、体育館で運動をしているにもかかわらず汗をあまり掻いていない。しかし、今、違う汗が体中に大量に流れている。その尋常じゃないもしかしたら病気じゃないかと疑わさずにはいられないくらいの量になっている。初対面の人が見たら、救急車を呼びかねない。

「あ～」

――またですか。この前みたいに倒れないでくれよ。しかしま～ほんとに自分自身のこういう話に耐性がないよな～。もう高一だぞ！

――

「と、時計見てたんだな！でも、試合中（クラスのＡチーム対Ｂチームというしょぼい戦い）だ、余所見すんなよ！」

ソガケンは、微量の冷や汗を掻きながら、走って行った。

「あ、ああ」

清次は体がすごく熱いことに気付き、下を向いた。

そこには、今まで流れていた汗が顎まで伝わり、小さい小さい水溜まりになっていた。

――気を使われてしまった。なんで感情をコントロールできないんだろう？しかも、それが、恋愛に関してそれも自分に対してのだけって……。おそらく、友達は知っているんだよな～あの事を、

俺はどうすればいいのかな？――

体育館という閉ざされた空間で、空を見上げようとしている。見えるのはただの、天井なのに、遠くの空を見つめているようにしか見えない。儚げに眼を細めて……。

――こんなに苦しいものだとは思わなかったな～どうせ叶いはしないのに……。俺はみんなにどう思われているのかな？でも、直接聞くのは恥ずかしいしな。

あなたはどう思っていますか？

美夏乃……ちゃん――

考えるのをやめにしたらしく、走って試合に戻った。

清次は運動神経ばりばりなので、すぐにボールを奪い、華麗にシュート。ドリブルも、ディフェンスも、バスケ部よりもうまい（このバスケ部が弱いのが原因）この時、誰の目からも輝いて見えるのだ。しかし、当の本人は全く気付いていない。ただのスポーツバカと思われていると思っている。

いわゆる、鈍感、ってやつに分類される。

他の人の恋路のことだったら、誰よりも分かるのに、それを自分に当てはめることができない。可哀そうな性格だったりするのだ。

「は～。今日はいい天気だな～」

清次は、いやそうに言いながら、バスケットボールを続けている。

――俺は、雨の日が大嫌いだ――

「は？清次、頭大丈夫か？」

そう、今は激しい雨が降っている。

一粒一粒が大きい、すべての音が掻き消されてしまうほどの音に量。

それが逆に静寂と呼ばれる時がある。この音以外何もないのだ。

第三話

五月一日

「・・・ちゃん。お・いちゃん。お兄ちゃん！」

――あ～清美か。って何で今日に限って起こしに来るんだ？今日何かあったっけ？――

清次は仕方なく起きることにして、目を開けた。

その時清美は青いプラスチックのバケツを傾けていた。

バケツの口の部分が下に向いた時、清美はすでに清次が起きていることに気がついていた。しかし時はすでに遅かった。清美の顔は少し曇り、清次は、時間が止まったかのように口を開けっぱなしで唖然として、何が起きようとしているのかまだ理解できていない。

「――――パシャー」

ベッドが何とも無残なことになった。

しかし幸いなことに、無害な水だった。

人類は、寝心地、保温性（今は夏だから関係ない）、デザイン、を追求して従来よりも断然よくなっている。しかし、水に濡れてしまうと、機能が、格段に落ちる。それ以前にじめじめして気持ちが悪い。

しかし全身にかかったため、すぐに諦め、プラスの解釈をするだろう。今が、夏なのだから。

「ご、ごめんねお兄ちゃん。もう起きたなんて知らなかったからさ～ね～。それに、これで目が覚めたでしょ？」

清美は兄に対しての妹特有の少し甘えた声で、この危機を乗り越えようとした。

――お兄ちゃんが私の可愛い声ですぐに起きれば問題なかったのよ！――

「おい、俺が起きていなかったらいいのかよ！ってかいくら何でもやりすぎだろ！」

清次は、怒鳴った。

この言葉を言った後、鼻に水が入ったのか、絶えず咳をした。

「大丈夫、お兄ちゃん？」

「大丈夫なわけないだろ！」

清美の少し心配した声かけに、清次はまた腹が立って、怒鳴った。

――こいつはアホなのか？まあ学力はあまり芳しくはないけれど、小学生じゃないだろ！中三にもなって、よくもまあこんなことができる。不思議でたまらない！しかも受験生なんだから、こんなことしてないで、勉強でもしてればいいじゃねえか！前俺と同じ高校に行きたいって言っていたけど、こんなことしてたら無理だな。絶対

「どうしたの黙っちゃって？でも今は夏だから、気持ちいでしょ？」

清美が屈託のない笑顔で、言ってきた。

清美の最後の一言でカチンと来た清次だったが、あまりにもムカつくと、怒りを通り越して呆れてしまう性格なので、溜息だけついて、許すことにした。

しかし、清次はここですぐ許してしまうと兄としての威厳が保てなくなると思って、怒っているふりをした。

「言い訳はいい！今俺に言うべきことがあるだろ！」

――少しぎこちなかったけど、今の清美の状態なら気付かないだろう――

「は～い」

清美はめんどくさそうに返事をした。

その態度を見た清次は清美を睨んで、ちゃんと謝らせようとした。

清次の目はいつもはいたって普通なのだが、睨んだ時、誰もが蛇に睨まれた蛙状態になってしまう。それほどの強烈なのだ。

しかし、兄妹だから清美は見慣れているはずなのだが、その清美ですらだめらしい。

今の睨みは、レベルで言うと十の内、八まで相当する。

「ごめんなさい」

清美は、睨みのせいで謝ったわけではなく、早くこの空気を打ち払おうとしている。

「あ、うん。それでいい。これで一応この件は許してやる。で、清美、今日は何曜日か分かるか？」

――妹だからこそ自分の非を認めて謝ってくれる。だからこそ威厳をもった兄としていられる。最近は、少し生意気になってきたが、まだ謝ってくれるだけましだ。うちらのクラスの一部の女子がこんなに素直だったらなんて嬉しいことだろう――

清次は少し相手を蔑むような溜息をついた。

第四話

「何曜日？日にちじゃなくて？」

「は？じゃあ両方教えてくれ」

清美の反応が少しおかしいのに気付いた清次だったが、気にすることなく、臨機応変な対応をした。

「あ、うん。六月二十三日、土曜日だよ」

清美は少しはっきりと言った。

――何で六月までつけたんだ？って、今日土曜日かよ！学校ないじゃん！ったくこんなに早く起こすなよ！まだ七時じゃないか！――

「あの～何で休みなのにこんなに早く起こすのかな？てっきり、平日だから起こしに来てくれたと思ったのだが……」

清次は頭をかしげて、清美がしたことを察することができていない。

清次は携帯を枕元から取り、開いた。予定の欄を見たが何も用事がない。それから他には何かないかと、携帯のメールの受信ボックスを開いたりしていた。

――お兄ちゃん。ホントに自分のことなんて何とも思っていないんだね、いっつも他人のところばっかり気遣って、すごくいいことだと思うけど、そういうところは私も好きだし、でも、自分を大切に

しないだなんて可哀そすぎる。せっかくのお祝いなのに――

「は～まだ気付かないの？今日はお兄ちゃんの誕生日でしょ！他の相手のは覚えているのに、自分のは覚えていないだなんておかしいでしょ！」

清美は、とても焦れったそうにして、仕方なく口を開いた。

清美は、なんだか恥ずかしそうにして顔を紅潮させた。

清美は、清次と目があったがすぐに目を放した。

「お、お誕生日おめでとう！いつもお兄ちゃんに迷惑かけているから、今日は休んでいて。私が、朝ご飯作るから！期待して待っていてね！」

清美は、何か言いたげで口をパクパクさせていたが、決心がついたのか、最初の一文をすごく大きい声で叫んだ。

テンパッたのか次の一文を早口で言い、この空気に耐えられなくなったのかすぐさま清次の部屋から出ようとした……。

「――――――ボン！！」

「ああ……」

清次の何も考えなしに直感的な魅入った声を出した。

朝起きたときには必ず窓を開ける、それが清美の癖である。当然今日も清次の部屋と真向いの清美の部屋の窓は開いている。

清美は、清次の部屋に入ってきた時、誕生日だからと、窓を開けて、風通しを良くした。（夏だから窓は開けっぱなしではないかという人もいるかと思うが、網戸がなくあの忌まわしい吸血虫が襲ってくるので、熱いのを我慢して密室にしている。しかし、これも昨日までで、まだ清次が寝ている間に今朝届いた網戸を付けたのだ）

ちょうど、清美が出ようとした瞬間、強い風が吹いてドアが思いっきり、元の場所に戻ろうとしたところに、走ってきた清美にタイミング良く……当たった。

清次は、寝起きでまだ頭が回転できていなくて何が起きたのかが理解できないでいたが、この出来事により頭が覚醒したのか、大声で笑った。そして今までに起きたことが、覚醒によって処理されていき、さらに馬鹿笑いして、数分止まらなかった。

「ああっ！あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

清美は、鼓膜が破れてもおかしくないくらいの甲高い声を立てた。しかし、二度目がないように、慎重かつ迅速に動いてこの地獄から逃げていった。

清美が逃げていった後すぐに、笑い声が消えた。

――笑いで誤魔化したものの、いつもは見せないあのドジっぷりに、不覚にもキュンとしてしまった。あんなにも顔を赤くして……
……こっちが恥ずかしいよ。いつもはあまり話さないから、ホントはああいう面も持っていると思うのだが……とにかく新鮮だった。

そういえば、いつからか清美とあまり話さなくなっていったが、

何かあったっけな～？小学校に時は、よく遊んだのにな～？――

心地よい風が、清次のべたべたした肌に当たり少し気持ちよさそうにしている。

郷愁の雰囲気を漂わせながら清次は、遠くに見える一つ突き抜けた山を見ながら大きな伸びをした。

「ふぅっ。シャワー浴びてくるか！」

再びさっきの惨事を思い出して清次は鼻で笑い、ベットに座っている状態から素早く立ち上がり一階に降りようと足を踏み出した。

「おっと……。やっぱり朝は弱いな～」

ふらつきながら、壁に手をやり下りていく。

この家の階段は木でできており体重がかかるとどの場所でもきしむ音が鳴る。どこかの古い家ではなく築４年の新しい一軒家なのだが、この音が風流なのか始めから鳴っていた。

清次と清美の両親がこの家を設計しており、このよく分からない階段もその一つである。

「清美～。シャワー浴びてくるから」

「あ……うん。分かった」

清次は台所に寄り清美に告げたが、この行動に清美は少し驚いていたが、今日の自分の行動を思い出して、

――気を遣ってくれたのかな～？今みたいにいつも私に構ってくれればいいのに～――

普段二人はこういうやり取りはしないのだが、今日は特別な日だから仕方がない。

第五話

「ピンポン」

「……」

「ピンポン」

「……」

「ピンポン」

「……」

「ピンポン」

「は～い。今いきま～す」

何回ものチャイムでやっと気付いたのか、清美は走って玄関へ向かった。

――何でこんなタイミングで来るの～お兄ちゃんが上がってきちゃうよ～――

左手の四つの指にはすでに絆創膏が貼ってあり、最後に小指に絆創膏を貼りながら玄関へ着いた。

ばらばらになっている靴をそろえて、自分の服装を整えて、ドアを開けた。

「は～い。何でしょう……か……」

あまりにも突然すぎたので、少し思考が停止していたが、それを隠すように会話をし始めた。

――誕生日か～。去年、一昨年はしなかったからてっきり忘れていたけど、やっぱり嬉しいものだな――

頭までお湯に浸かりながら、清次は顔を笑いの形に変えて、その時に漏れた空気の塊をパッチリ目を開けて息が続くまで見ていた。

ピチャピチャと水と水とのぶつかる音が鳴り風呂場に響き渡る。

ここの家は、他の家のお風呂とは形に違いがあり、高さはふつう何のだが、縦横が長く８００リットルものお湯が入る大きいお風呂、だから、思いっきり足が伸ばせてすごくリラックスができる。

――我の妹ながらあっぱれだ！ホント気がきく。でも今日限りだよな～――

清次はシャワーを浴びようとした。しかしお風呂が入っていた。

お風呂とシャワー、どっちがいいかは賛否が分かれると思う。しかし、清次は、大のお風呂好きなのだ。

「ふ～ん、ふ～ん、ふ～ん」

最近はやりのＪｐｏｐの鼻歌をしながら、一旦お風呂から上がり、髪の毛を洗う……。

「あれ？出ない」

――最後か～。中にへばりついているのを取るしかないか――

面倒くさそうに作業をして最後の最後まで使い切り、あまりにも綺麗に取れたので清次は、軽い達成感に浸っていた。

――しかしなぜリンスはまだ二割は残っているんだろう？まあ、いいか。それより清美に伝えなくては！――

風呂場特有のドアを開けようとしたら、滑りそうになったがぎりぎり回避して、清次は一瞬止まった。そして、ゆっくりドアを開けて、

「清美！シャンプー無くなったから買っといてくれ！忘れないように今すぐメモっておけよ！あ、そうそう、歯磨き粉も無くなってたんだ。それもよろしくな！」

何度も言わないように清次は大声で叫んだ。

前述べたように、清次と清美はあまり話さないのだが、生活する時に必要なことがある時は普通に話す。要するに、それ以外の会話が極端に少ないのだ。

「わかったよ、お兄ちゃん！」

よく聞こえるように清美は口に手を縦に当ててメガホン代りにして応えた。

清次に言われた通り清美は素早く紙にメモって、すぐに再び料理に取りかかった。

第六話

清次はお風呂から上がりいつもの歯磨きへと行動を移す（朝は早く起きるのが大変で時間がないのでいつもは、シャワーなのだが）。

「んんんんっ。あ……そうか、終わったんだった」

――さっき清美に言ったばかりなのにな～俺はアホなのか？

……。

誰に聞いたわけでないのに答えを期待してしまった。やっぱり俺はアホなんだな！――

歯磨き粉がなかったことを思い出した清次は、仕方なく何も付けずに歯を磨くことにした。

一歩また一歩、普段どうりだらしない格好でだらしなく歩き、新たな水分を求めて台所と言う楽園へ向かおうとしている。

――あ……。そういえば、フルーツ牛乳切れていたはずだ～～～～。何でまた今日に限って……。仕方ない！清美のコーヒー牛乳もらうか！――

朝、清次は、汗でべたべたしていたからお風呂に入った。その期間、水分を一口も補給をしていない。いつもは水分は捕るのだが、今日はずぶぬれで気持ち悪くて、すぐにお風呂に入った。

今はもうゾンビ化してしまっている。

清次は、目的地のドアまで到達して今まさに手をかけた。

「清美、み、水を！…………？」

清次は、断じて味のない水を飲みたかったわけではない。ただとっさに出てしまっただけだ。

これは置いといて、清次に目の前には、清美ではないものが映っていた。

「…………ちょ、ちょ、清…………。な、なんて格好してんの！ふ、服、服着なさいよおおおおおぉぉぉぉぉぁぁぁぁぁああああああああぁぁぁぁぁぁぁ」

そこにいる清次になれなれしく話している女の子は、最初何が起きているか分からずに、清次を注視していたが、数秒後に少しを理解をして怒鳴った、が、もう数秒後すべてを理解して、急に顔が紅白とくっきり分かるようにその白い肌から真っ赤に変わり果てた。そして女性としての叫びを出して出して出した。

清次は、腰に一枚タオルを巻いているだけであとは何も着ていなかったのだ。

「…………………」

清次の方も、最初は何が何だか分かっていなく、最初に掛けるはずの「何でここにいるんだ！」という言葉が出せず、すごく動揺をした。顔は赤くなりはしないものの、頭には血が大量に上ったらしく、朝が弱い＝朝は低血圧、お風呂と羞恥による急の血圧の上昇、

地面の上に立っている、水分不足……。

「もう駄目……」

誰にも見せることができないような情けない声を上げて……清次は歯ブラシをつけっぱなし、しかし幸いにも後ろに……棒のように倒れた。

「ふぇっ……？」

女の子は、清次が倒れたのと同時に可愛い声を出して、ダブルに予想外なことが起きて、頭が『てん』になっている。

「は？ほぇ？え？えええええぇぇぇぇぇぇぇ！な、な、何が起こったの？って……き、清、清！大丈夫……！！」

危険を察知したのか、すぐに女の子がパニックに陥り、清次のそばに光のように近づき、体を強く揺さぶった。

何度も何度も女の子は清次の名前を呼んで体を揺さぶって動揺が頂点に達している。

第七話

周りの音は、もう八時だというのに、会社に行くサラリーマン、パートに行くＯＬ、土曜日なので、子供たちが学校に登校することはないが、出かける音、それ以前に何の音もしていない。そんな中で必死に叫ぶ声だけがこの家中、いや近隣中響き渡っている。

――何でこんなことに？どうすんのよこれ～～～――

「う、うぅっ。み…ぅ」

ようやく清次は、気絶から覚めた？……上言で必死に叫んでいただけ……。

人間の本能が、水を求めている。清次は、典型的な脱水症状に陥っていた。

「み、水が欲しいのね！すぐに持ってくるから！」

慌てながらも、的確にコップに水を汲み、棚に小指をぶつけてもお構いなしに、少ない距離だが、到着した……。

「……へ？ひ、い、いやあああああぁぁぁぁっ！！！！」

「――――パリン」

水に入ったガラスコップが無残な状態になってしまった。

ガラスの破片が飛び散り、女の子の足に当たり少量ずつながら赤

いものが流れ、少しグロイ形になってしまっているにもかかわらず、それに気付かず見てはいけないものを見てしまったかのように、呼吸、瞬きなどをせずただ立っている。

そこに広がる景色は、清次の……むき出しになった男の勲章があった。

女の子が、さっき夢中になってどうにかして清次を起こそうとしている間に腰に巻いてあるタオルが採れてしまい、今の今まで気づくことができないでいた。

「あっ……水を持っていかなくちゃ」

やっと女の子は状況把握ができたようで、歩きながら新しいコップを出して、華麗にガラスの破片をよけて、清次の場所に到着した。

清次のことを気にしながらさりげなく女の子は、タオルの位置を元に戻そうとした。

――こういう状態になっているんだから、覚えてないわよね。私は何も見ていない、見ていない、見ていない、見ていない――

女の子は少しの間……見ていた。

――わ、私は何を！！――

女の子は、何も変なことなど考えていないと頭を振り、

「はい。水」

同時に清次の目を見て瞼が閉じているのを見て、女の子は安心していた。

清次が自力では起き上がれそうにないのを見て、女の子が頭を持ち上げ膝枕の形をとった。

――不本意だけど仕方ないわよね。清次のためだのも！あ～小指が痛いわ――

「ありがとう」

ちょうど気がついたみたいで、瞬間的に感謝の言葉を述べ、いつの間にか生命の源が清次の口に流れ込む。

少しずつ水が減っていきすべてを飲みきった清次は、満足したのか五秒もかからずにまた夢の世界へと旅立ってしまった。

「な、何で寝るのよ！うううぅぅっ。もう！！」

少し女の子は目が潤んでいたが気にしないとして、このどうしようもない気持ちをどうやって、誰も傷つけずに発散するか考えている。

――どうすればいいんだろう？またこんな気持ちになってきちゃっている。　清がいないときは大丈夫だったのに、清が前にいると抑えられない。

『三年前と同じことを繰り返したくないよ。清助けて！！！！』

なんでだろう？清に助けてほしいなんて。清が悪いのに……

駄目だな私――

第八話

「――――――ドスン」

開きかけのドアから一筋の光が差し込みきらきらと輝いている。

清美は、今の光景を夢中で見ていたので自分が出してしまった大きな音に全く気が付けていない。それどころか身を乗り出して、もっと近くで見ようとしているので見つかるのは時間の問題である。

「……」

清美と女の子との時間が一瞬止まった。

呼吸が止まり、瞼を閉じず、思考も停止する。しかし女の子の冷や汗だけが頬を伝わり顎まで流れてきた。

一滴が輝きながら地面に落ちた。

それが合図になったのか、再び小さい世界が動き始めた。

清美が爆笑をこらえてハニカム。

女の子は再び顔に変化をもたらして、怒られて今にも泣きそうな子供のようになり、誰にも見られまいと縮こまった。

「あ～。ええっとね。これはね～その、ち、違うのよ」

「違うって何が？ふふっ」

いやがらせのように揚げ足を取り、清美は嘲笑した。

――清美ちゃん。これは事故なのよ！決してそんな……そんなって……。ううん。私は何も考えていない。何も考えていないんだから！――

目が誰にでも分かるくらい泳いでいて明らかに動揺しているのが分かる。その後に女の子は愛想笑いを浮かべた。

清美は既に台所の中に入っており、不安定になったドアが勢い良く閉まる。

その時に吹いた風が清次と清美と女の子包みこみ、腰まである女の子の長い髪がさらさらと揺れた。

「ただの事故よ！」

今まで思っていた心情を振り払い、大声で強制的に何もなかったように繕った。

「それより清をなんとかしないと……ああ……そうね。さっきいきなり倒れちゃったのよ。それですごく水分が欲しかったみたいで……。多分、いや、脱水症状だわ」

――こんな面白いところに出くわして、あ～もう、からかいたいじゃない！でもこのくらいにしておかないと。面倒なことになるかもしれないからね――

「あ、うん、たまにあるから」

女の子が空気を変えたくて言った言葉が、今は一番大事なことだったので、二人とも意識が清次の方に行った。

「もう一杯持ってくるわね」

「うん、お願い」

女の子は冷静さを取り戻して、何も起きることもなく水を運んできた。

「お兄ちゃん寝ちゃっているね」

「うん。さっき一杯あげたら寝て……この寝顔を見る限りもう水はもう必要ないのかしら」

清美に悟られないくらいの瞬間に清次をマジマジと見た後、近くにあった机の上にガラスコップを乗せて、清美に確認をとった。

「で、清をどうすればいい？ここはいくらなんでも邪魔でしょ」

――それに、は、裸だし――

「そこのソファーで寝かせよう？お兄ちゃんの部屋に運ぶわけにもいかないから。ね」

清次の真ん前まで来て、女の子にＳＯＳのサインを目で送った。

清美と女の子の息はピッタリで目的地であるソファーに清次を乗せることに成功した。

第九話

二人は清次の顔をまじまじと見ている。

顔がほんのり赤く染まる。

――他の誰でもない清美ちゃんだし大丈夫よね――

――そういえば月姉なんだよね～だから大丈夫か――

二人が同時にお互いの顔を見た。

「「ふふふっ」」

お互いに笑みを浮かべて、落ち着いた時間がまた戻ってきた。

「……ふぁ～」

清次がバカでかい口を開けて、今日だけで三度目の起床となる記念すべき欠伸をした。

「「やっと起きたね～」」

清美と月姉こと月音が顔を見合わせて『ね～』を強調させて、二人にしかわからない意志疎通を交わした。

そして三人が目を合わせる。

「……月音……何でここにいるんだ？」

驚き半面嫌々な気持ちを表に現して清次はため息をついた。

突然の出来事でいろいろと頭の中がごちゃごちゃしていたが、一つ、月音の目を一瞬たりとも瞬きせず目を放さないで清次は見ていた。

「何でって……」

言葉に詰まり、月音は清次の目を見る

「じ、じろじろ見んなななあああああぁぁぁぁぁぁ！」

月音は右手を高々と上げ、どんどんスピードが増して下に降りてくる。

「あっ！」

「パーン」

強烈なビンタガ飛んだ。

「痛って…………………」

強烈な痛みに手では抑えずにはいられなかった。

バランスを崩しその時強い風が吹いた。

「「…………」」

「…………」

自分の目から見える一直線上先、数本のビルしか見えない。

「いやあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

――ひとりぼっちになっちゃった――

「――ひっ――ふひっ――ひぃっ――」

月音は清次の頬を右手で優しく触れていた。

月音の手が真上に上がった瞬間、清次と清美は固唾をのんだ。その時の時間が止まったかのようで、月音の手をじっと見るばかりであった。

「ごめんなさいっ。わったし」

こんな行動に出たことを月音は自分自身に驚き、責めた。

既に一粒の塩水が落ち、月音は清次の頬から首にそして肩にそして自分の腰のあたりに勢いなく垂れた。

しかし二滴目はなかった。

「あ……。泣くな！俺を見ろ！」

月音の態度に戸惑いはあったものの清次は、今にも狂いそうな月音に男らしく言い放ち、自分の胸を拳で力強く叩いた。

「うん」

弱々しく頷き、じっと月音は清次を見て自分を正当化しようとして、いつの間にか嘆き悲しむ表情から、真面目な表情になっていき自分のことを考えられるようになってきた。

月音は一度目をつむり、もう一度、清次の目を今度は柔らかい目で見て『もう大丈夫』と一回頷いた。

第十話

「ほら大丈夫だろ！過去なんて忘れちまえ！」

「うん」

清次は月音を諭すように横になっていた状況から上半身だけを起こし、顔が近くなったが気にせず月音からの視線をオウム返しした。

視線を先に外した月音がまた、しかも元気を取り戻して視線を戻し頷き、柔らかく微笑んだ。

さっきの空気とは一変して、柔らかい空気が流れている。

「あっ…お兄ちゃん……」

「ん？あ……」

「きゃあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ」

月音は全速力で逃げていった。

その時はいていたスリッパの片方だけ脱げて、一つ入口に淋しく在った。

台所には二つ出入り口があり、出ると長い廊下が現れる。

「ごめんな。許してくれよ！」

「……」

ぐるぐると台所を回りながら、今までこの繰り返しで何も進展がない。

清次は機嫌を直すために仕方なく謝る。いや、少し面白がっていた。しかし、「このお目出度い日にこんなぎくしゃくした気持ちで一緒には過ごせない」という気持ちが心の内にあり、

――こんな謝り方は駄目だな。「俺」が悪いんだから――

「頼む。許してくれよ！」

「……」

二回目の謝罪からのこの気持ちの入りようが、まだ無視をし続ける月音の眉毛をピクリと動かした。しかも、その数秒後に微小の困惑の表情を見せた。

「このとおりだ！！」

本当に悔いている、そんな表情で月音を見つめ左手の薬指を鳴らした。

「ちょっ……そんなこと……私なんかの機嫌をとるために……」

――なんで、なんでそんなに真剣になって謝るの？清は何も悪いことはしていないんだよ！なのにどうして？ただ私が逃げちゃっただけで、それで、それで――

さっきの無視の様子から一変して、月音は困り果て思いっきり唇を噛んでいた。

「いや。謝らさせてくれ。あのこと思いださしたのも俺のせいなんだから！」

「違うの！すべてはわた」

――しの所為なんだから、すべて私の……――

二人とも自分に負い目を感じ自分の所為だと思い込もうとしている。

負のイタチゴッコが始まりそうな勢いだった。

――そっか。今までのことと、少し重なって、そしてまた。

だからこそ裏を返せば、本当に良い奴なんだな～ごめん――

「もうしゃべるな。もうみんな気にしちゃいないんだ。おまえだけが気にしちゃ損だろ！」

月音がまた謝っている、途中から清次がでかい声で遮り、怒鳴りながらも優しさが感じられる言葉で、月音を落ち着かせようとした。

「でもだからってそんなの」

――いいわけがないじゃない。私が納得できないのだから――

納得がいかなく、でも清次の強い言葉に、月音の言葉の強さがだんだん弱くなってきた。

第十一話

「そんな謙遜するな。俺はあいつらみたいに変わってなかったろ！だから見捨てない。月音が好きだからな。それに引っ越したし。前、月音の町の方行ったらたくさんの友達と一緒にいた。お前が一人になるはずがないんだ。俺が確信しているんだ。間違いない！」

清次は今、この時、言葉に魂を込めて叫んでいた。言い終わった後「何でこんなに熱くなってしまった」と少しの羞恥心と戦っていた。

「……うん。ありがと」

「月音？何か顔赤いぞ。熱でもあんのか？」

「ふぁぇえええええ！な、な何でもないわよ！」

明らかに月音には何かある。でもそれに気づく者もいれば気付かないものもいる。

世の中には何の為にあるのかが分からない物、考えがある。それをどのように理解してそしてその後どうするかが鍵になる。小さなことだが今の月音の反応を追求していけば何かが分かったかもしれなかった。一つ一つ重要さの順位はあるのだが、一つのことでも一人一人重要さの順位はある

「そうならいいや。それより腹減ったな～」

さっさと冷蔵庫に向かう清次は、かなりの早歩きだった。

「待ってよ清、まだ」

――いいかサプライズなんだから――

「まだなんだ？」

「ううん。何でもない。それより私もおなかすいちゃった」

あからさまに違う話題をふって、月音は今の言葉の追及をさせないようにした。

「おまえの分の飯って、あんのかな？」

清次は、わざと話題を変えたのを分かっていたが、話したくなさそうだったので、その話題に乗い、以外にもそれに疑問を持ち『どうなんだろう？』と困惑の表情を見せた。

「うん。わたしもお邪魔している身なんだけど清美ちゃんが用意してくれたんだ」

「そうか」

月音の謙遜っぷりの片言に、喜びの念が少なからず隠れており、清次は、それに気づいたか気付いていないかは、分からない。だが極僅か、月音に気づかれるか分からない笑みを見せていた。

「「「いただきま～す」」」

「それにしても今日はすごい豪華だな」

「あったり前でしょ！」

小さい子が背伸びをして、可愛げに上目遣いで、真剣に誰かに分かってもらいたいような、そしてどうだと言わんばかりに胸を張り、自慢をする時の顔。この仕草がどんなに可愛いか、それは清次にだけしか見せないのだろうか、清美がどれだけ可愛かったか分かっていないのだ。

――……久しぶりだな、こんな顔。そしてこんなに可愛くなってしまったか。なんだろ、怖い。こんな可愛い子をほっとくやつなんていない。はぁ～――

「そうだな、ありがとう」

清次のただ一言の『ありがとう』それだけですべて言いたいことが伝わる。この世に二人としていない血のつながっている兄妹、たとえ今まであまり口を利かずとも、その絆で結ばれていれば零れ落ちることはないのだ。

第十二話

「へぇっ、あ、どういたしまして」

最初、少しの戸惑い、驚きがあったものの清美はすぐに払拭した、が、最後のお礼の言葉が少し早口になってしまった。

――お兄ちゃん、そんなの反則だよ～そしたらもっと……――

「あのさ～せっかく三人で昼食なんだし高校の話とか今の近況を話そう。月姉の高校の話もすごく興味あるし」

清美は清次の目を見ながら言い、その後清美の顔を意味ありげに見つめていった。

いろいろと話は弾み時間の流れのはやいこと、四時半の鐘が鳴っていた。

「私もう帰るね」

この言葉の後に「また明日」とでも言いそうな軽い感じで、もしかしたら本当に明日会うかのような、提案だった。

「ああ、そうだなお前こっから遠いもんな。気をつけて帰れよ」

月音の自然な言葉に清次は何の違和感も持たずに、『いつもどう

り』な感じでの返答をした。

月音の家は、今はここの最寄駅から二十駅先にあり、そしてこの県のもう一つの都市にあたる。そしてこの流れから分かるようにここの最寄り駅は都市部の中心の駅、ではないのだが、そこの一つ先の駅である。

「うん。でもその前に」

一旦、月音は言葉を切り、そしてまた続けた。そして後ろに持っていた綺麗に包まれた小さい袋を前の方に持ってきた。

「誕生日おめでとう」

ぶっきら棒にしようと月音は努力しようとしたが、清次と目があった瞬間恥ずかしさのあまり顔が紅潮した。普通？ならこの時点で『恥ずかしい』という気持ちを表に出さないように、口調が強くなったり、『バン』と袋を渡してさっさと帰ってしまう、そんなこともあるかもしれない。しかし、その後満面の笑みで大事そうに『プレゼント』を渡した。

「やっぱり覚えててくれたんだな。ありがとう」

少し皮肉がこもっていた。

本当は、もっと吃驚したかも知れない。しかし、清次は、朝の清美のおかげで今日が自分の誕生日ということを知っていた。しかも、月音が、プレゼントをくれなかった年は無かったからである。

「まあね」

――忘れるわけは無いわよ。でもこの反応、私だけ取り残されているのね――

月音は清次の足から全身を見上げ、何の前触れもなくウインクをした。

「あ、そういえば世の中って物騒だよね～。駅まで送っていくよ」

とってつけたような言い回しで、清次の言葉の中に『心配』の文字が見当たらない。

もしかしたら、この微妙な空気を変えたかったのかもしれない。

「何ぼけてんの、ふっふふふ」

「じゃあ私が月姉を」

清美をとり残して、さっきまで二人の世界に入っていたが、ここぞとばかりに清美は悪乗りしてきた。

第十三話

「もう、清美ちゃんまで……」

月音は、笑い声が呆れ声に変わり、でも笑ってた。

「じゅあ、私はもういくね」

「ああ」

「あ、夏休み明けまた来るから。じゃあね」

月音はドアに手をかけた時、思い出したことを口に出した。

「あ？うん。またな」

何でだろうと疑問に思っていたが口に出さず、また会うことを当然のように約束した。

「さようなら」

「……あ、月姉、じゃあね」

――なんで私、ボ～っとしてたんだろう？――

扉の向こうに広がる景色があった。五十メートルだろうか？駅までの距離が。

――さっそくプレゼントを開けますか――

月音が帰った後すぐに、部屋に戻り『大事なもの』に手をかけた。

赤い長方形の紙袋に緑の斜めにかかったリボン、クリスマス？と勘違いしてしまうような配色で、真ん中にかわいらしい絵が描かれている。

その一生懸命作られたであろう袋を、清次は破れないように綺麗に剥がしていく。

すべてを剥がしてあらわになったのは、『幸福ランド』の無料券二枚と、高級チョコレートと、一番下に隠れるように潜んでいた手紙だった。

清次はゆっくりと手紙を手に取り周りを見渡し、最後にドアに注視した。無意識にこの行動を起こしたのだが、誰にも見られたくない、一人で読みたい、こんな思いが心の奥にあったのだろう。

そして、手紙を開いた。

清へ

今日はお誕生日おめでとう

去年の誕生日は、いろいろあり清の家にいけなかったから、無理やり清の家にプレゼントを送り届ける形になっちゃったけど、今日

は清に会えてそして手渡しでプレゼントをあげられて、嬉しかった。この気持ちは今書いている時はわからないけど絶対に嬉しいと思う。だから、清も喜んでいてもらえるとうれしいな。でも、本当は無くなるものではなく、形に残る物がよかったけど、彼女でもないし駄目だよね。

私をふって三年が経つよね。あのときはすごく悲しかった。そして今も悲しい。清、この意味はわかるよね。今は家が遠くなって会えなくなっちゃったけど、清が時々でいいから私のことを考えていてくれると嬉しいな。

夏休み明けもしかしたらまた清の家に行くかもしれないからその時には返事お願いね。時間はたっぷりあるから、存分に悩んでください。

幸福ランドの券は、清美ちゃんもしくは清の友達とでも行ってください。そして楽しんできてください。

本当はもっと書きたかったけど、さすがに多いのは引くよね。だからこのくらいで終わりにする。

じゃあね

佐橋　月音より

「……月音」

清次の申し訳ない気持がいまの表情を渋くさせていた。

――何か最後のところが妙に空いてるな～――

清次が手紙を顔に引きつけて目を凝らした。

――消した跡があるな～まあでも詮索はやめておこう。……消したのだから――

「――コンコン」

「お兄ちゃんちょっといい？」

清美の声はいつもよりトーンが低く、何かに恥じらっている震え方をしていた。

「ああ、いいぞ」

ゆっくりとドアが開いて清美の足が一歩一歩と部屋の中央まで来た。清美が清次の視線に入り合わさった時、もう一歩足を進め清次と四十センチの差になった。無表情のまま数分見つめあっていたが、もういいだろうとポケットから何かを出して清次の手に乗せた。そして、すぐさま背を向けて歩きドアの取っ手に手をかけた時

「改めて、おめでとう。……じゅあ」

そっけなかった。

「ああ、ありがとう」

――三年ぶりか――

清次は受け取ったプレゼントを高く上げ窓を見た。ちょうど沈みかけの太陽と重なって眩しそうだった。

第十四話

ピピピピッピピピピッピピピピッ

――あれ？いつもならこの時間なるはずなのにどうしたんだ？――

ガチャ。清次の部屋にドアが開いた。誰かが泥棒のように近づいてくる。

「なんかようか清美？」

目を半開きにしながらベッドから体を起して横を向いた。

「へぇえ！！」

素晴らしく驚いたのだろう。突拍子もない声で叫び、目をパチパチさせながら、起きている存在を否定しようかという目で、清美は目撃していた。

「何で起きているの？もしかして目覚まし鳴った？」

「はぁ～～～。何でそんなことを聞くんだ？もしかしてお前が止めたのか？」

清次の目が半開きなことは置いといて鋭さが宿っていた。しかし、清次が目つきが鋭くなるのは半分が無意識なので清美はもちろん僻んではいなかったが、少しの間呼吸を止めていた。

「……そう。私が止めたの」

よく分からない空気に罪悪感を覚えた清美が、『何かを納得した』ような韻を踏んで正直に答えた。

「何でまたそんなこと？」

「……」

――今日からお兄ちゃんを起こしてあげよう！って心に決めていたからです――

当然思う疑問が問われ数秒が経った。

清美は中学の制服（ブレザー）裾を思いっきり握り、この兄に分かってもらえない複雑な気持ちが溢れ出てきて、その力を分散させようと努力している。

「まあいいや。飯作ってくる」

――バカなのかこいつ？いやバカか。まあこんな小さいことで朝からテンション上げたくないしいいか。もし朝俺が起きれない人間だったら怒ったかもしれないが、あいにく起きられるしな。でも何で止めたんだろう？――

はぁ。と一息吐いて立ち上がった清次が、立ちくらみでゆらつきながらも一歩を踏み出した。二歩目を踏み出した時、

「大丈夫だよ。私がもう作ったから。そして、今度から交代制はなし。私が毎日作るようにするから」

清美はきっぱりと言い切り、清次が断ってもそれを認めないという目で清次を見た。

「そうか……なら頼む」

――もしかしたら朝食が作り終わる時間まで寝かせようとしたから、だからかな～――

断る要素もなく、逆に助かるとさえ思って、快く了承した。

「じゃあ早く下りてきてね」

清美は少しはつらつとした声で言った。

部屋から出た清美は少しにやけて次の独り言を喋った。

「二つのうち一つは達成したけど、さすがにもう一つは厳しいよね～毎日私がお兄ちゃんを起こしていいって。キャァァ～」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3859y/

叶えたい夢

2011年12月11日00時49分発行